

1月10日の宿は、田舎の宿がよいと許さん(私の友人)に希望を伝えたら、前号の拙文でふれた「三義木彫博物館」そばの民宿「同心園」を紹介してくれた。周りは畑やたんぼ、その中に民家が点在して、山奥というより都市郊外の山村風景だった。料金は朝食付き二部屋3人で3800台湾元(1万円ちょっと)。こざいいな新しい部屋で、経営者の若夫婦も感じがよい。許さんはこの夫婦と話すときは北京語で話していた。若い世代は北京語を使うようだ。台湾人同士で初対面の場合、最初に何語で話しかけるのだろう。

台湾人のことば事情

ここで本題から脱線して私なりに理解した、台湾における言葉の歴史を説明する。

清王朝以前に大陸から移住した台湾人「内省人」の多くは福建省方面からの人が多かったので主に福建省の言葉「閩南語」から派生した「台湾語」を使った。1895年、日清戦争で台湾を手中にした日本は、強制的に日本語を使うよう定めた。学校教育を始め日本語が公用語となった。以後50年間、台湾の青少年は教育の場で日本語を習い、父母や、祖父母など家庭での会話は台湾語だった。

1945年、第二次大戦の敗戦とともに日本は台湾から引き揚げた。無政府状態になった台湾に、共産軍に追われた国民党蒋介石軍が大陸から逃げてきて、政権を敷いた。この時期に国民党とともにやってきた資産家など中国本土出身者を「外省人」という。国民党は、台湾も中国の一部でいずれ大陸に戻って政権奪還するといひ、台湾占拠の根拠を主張した。従って言葉も北京語を使うべし、ということで台湾人にとっては異国の言葉、北京語が「国語」になった。すでに成人した台湾の人々が「北京語」を学習するのは大変だったろう。しかし、台湾は正式に中国に支配されたことはなかった。

時が流れて、大陸奪還は名目だけになり、中国本土の主権は共産党の「中華人民共和国」になった。中国は国民党がいう「台湾は中国の一部」を逆手にとり台湾の主権を主張している。

そういった経緯で台湾に住む2300万人の人々は、婚姻関係、学校教育、家庭環境などが複雑に絡んだ言

語社会に暮らしている。一昔前の学校教育は、いずれ大陸に戻るときがくるといふ国民党の考えが反映し、社会科の授業は中国大陸の歴史、地理を学習していた。行政単位も大陸籍の「中華民國」が建前なので自動車のナンバープレートは「台湾省」になっている。他省の車は見たことはないが…。

台湾鉄道最高点と龍騰断橋

1月11日朝、許さんが助手席に奥さんを従え車で迎えに来た。宿からほど近い鉄道遺跡に案内するという。そこは路線改良で使われなくなった鉄道線路や駅を観光化した名所だ。くねくね曲がる田舎道を10分くらい走ると、目的地に着いた。土手のように見えるのは線路の盛り土で、レンガ造りのトンネル入り口も見えた。

トンネルのきわにある民間の駐車場に車を入れ、土手を登ってトンネル入り口に立つ。総勢5人でトンネルに入り鉄路の先のかまぼこ形に光る開口部を目指して歩いた。案ずることもなく割合にすぐに向こう側へ抜け出た。

トンネル出口から300mくらい先に「勝興」という駅があり、そこまでポイント装置をよけながら行く。鉄路の周りは畑で、イチゴ栽培のハウスもあった。1998年に路線変更して新線ができてから「勝興駅」は廃止となったが、ホームや駅舎などは保存され史跡となっている。三義付近は客家の人が多く、ここでも客家の土産物屋などがあつた。1930年までの駅名は「十六份信號場」で、16軒の家があつたということだろうか。

勝興駅は台湾鉄道最高点でもあり、海拔402.32mの石碑があつた。日本の最高点(小海線)1345.67mに比べるとかなり低い、台湾の鉄道は高いところを通す必要がなかったのだろう。

最初のトンネルには戻らずに、車道を歩いて山越えし、車を駐車したところまで戻った。すぐそばの母屋から小太りの小姐が駐車料金を取りに手品のように現れた。A



トンネル入り口



鉄道最高点記念碑

さんがこの小姐の衣服から「ヒノキのいい香りがする」といい、この家がヒノキ油精を製造販売している工場と分かった。早速案内してもらい見学。樹木の油精を簡単な蒸留装置で抽出する仕掛けだ。製品はテーブルの上に並べてある。前回に述べた「三義」の木彫の店にも同じ物が売られていたが、こちらは製造元なので純度が高いのではと、みな勝手に思った。近くに置いた樽に抽出済みの木屑のチ

ップがあったが「精」を抜かれてしまったので、香りはしなかった。

種類は台湾ヒノキ油精とクスノキ油精の2種類あり、10ccほどの細い瓶で、ヒノキが100元、クスノキは50元であった。三義で見たときと同じ値段だったが三義のものは「阿里山」と書いてあったので、後で思うと信用できなかった(私は買ってしまったが)。クスノキ油精は三義には無かった。商談となり、私とAさんは適度に値切って購入し、双方満足して別れた。駐車場料金はタダになった。

次は「龍騰断橋」。1935年に「關刀山大地震」という大地震があり、鉄道の橋梁部がぐずれてしまった。セメントを使わないで、レンガ積みで造った橋は歴史的に価値があるとされ、ここも観光地となっている。「勝興駅」から車で10分くらい。行ってみるときれいに公園化され整っていた。公園の階段で花束を持ったウェディングドレス姿のカップルがポーズを取って立ち、数人の撮影スタッフに囲まれていた。だがこれはモード雑誌のロケではなく、結婚を予定した台湾カップルの記念撮影で、アルバム作りの専門業者が取り仕切っているという。日本人だということ、気恥ずかしくていやだという人が多いと思うが、台湾では当然とされている。同じ日に近くの有名庭園レストランで昼食を摂ったとき、何組かの撮影カップルが雨が降るのに肩を露出して、寒そうにカメラに笑いかけていた。

🌟映画「五月之戀」

日本へ帰国してし2カ月くらいしてから、BSテレビで「五月の恋」という台湾映画を見た。台湾人気歌手グル



そのまま残している「勝興」駅のプラットフォーム



油精の蒸留装置



「龍騰断橋」、崩れ落ちた橋梁

ープの裏方スタッフ阿磊^{アレイ}青年と、ハルビンの芸術学校に在学する京劇俳優趙瑄^{ジュアン}との物語だ。親善公演で台北に来た趙瑄には、国民軍兵として台湾で生涯を終えた祖父がいた。祖父は身重の妻(趙瑄の祖母)をハルビンに残し台湾に来たが大陸へ戻れなくなった。息子(趙瑄の父親)が生まれたことも、妻が亡くなったことも知らず時が過ぎた…。成人した趙瑄は祖父のことを知りたく思い、手紙の住所を頼りに祖父の台湾の妻だった人の家を訪ねる。その場所が「勝興」というわけだ。私は行ったばかりの「勝興駅」が出てくるので、興味深かった。同じトンネルかどうか分からなかったがトンネルを逃げる場面もあった。

映画では、趙瑄は一人で列車に乗り「三義」経由で、「勝興」へ行くとつもりだった。しかし列車が通らなくなったのを知らない彼女は戸惑う。居合わせた駅員に「勝興」への行き方を尋ねたが、駅員の台湾訛りがひどくて何を言っているのか分からず、仕方なく台北に戻る。

翌日、阿磊に「勝興」への案内を頼む。順調に祖父の家に行ったが台湾の祖父の妻は留守であった。そのうえ空き巣の疑いまでかけられる。夕方台北へ戻ると、趙瑄は別れぎわに当日の夜公演の「京劇」のキップを手渡す。そして必ず見に来るようにと念を押す。この場面では自分が京劇俳優とはいわない。キップを渡された阿磊は券を見て「京劇！」と露骨に迷惑そう。その夜阿磊は仕方なく京劇に行くが観客は年寄りばかり。退屈して公演中ほとんど寝ていたが最後になって彼女が主演の女優だと知る。

翌日二人が会うと、趙瑄がハルビンから来たのを京劇を見て知り「道理で巻き方がきついと思った」という場面がある。このあとふざけて巻き舌を誇張してしゃべる場面や台湾風を強めてしゃべる場面が続く。こういうおかしなところは私には分からなかった。台湾の北京語と、中国東北地方の北京語ではかなり違うのだろう。

台湾と中国で生き別れになった人々が親族訪問を許されたのは1987年になってからであった。台湾は長く続いた戒厳令を解除、同時に中国への親族訪問を解禁した。

今では、中国と台湾は経済的な結びつきが強まり、双方にとってお互いが必要である。しかし、台湾の帰属はのどに刺さった小骨のようにいつまでも解決しない。台湾の人の望むように解決することを願う。 終り

▶ 参考：三義木彫美術館：<http://wood.mlc.gov.tw/>
勝興駅紹介：<http://www.kunde.org.tw/look-02.htm>